

び、十一時半警鐘乱打。嘉瀬川橋約一寸位、金木川橋も後数尺にて、官材流失二万石塞がり、金木浸水三百戸、破壊五十戸、馬一頭、橋三ヶ所。嘉瀬浸水二十五戸、冠水五十町、喜良市橋及木炭倉庫。くはなり。

昭和十九年

◎北海道鯨大漁。 ◎五月二十九日小学校運動会。 ◎九月十二日東風強く樹木倒れる。 ◎九月十八日未明より大暴雨、強権発動(産米供出)に回る。 ◎十一月八日昨夜より大暴風雨 月二十八日午後十二時五所川原大火七百

山中日記

農業

氣象

編

五十戸余、上平井町築舎社火元とされる。 ◎十二月十日松根掘り(軍用機用油)。吹雪で津鉄止る。 ◎一月十日餅つく。 ◎一月二十日津鉄時折区間運転。二十一日大吹雪で津鉄止る。 ◎二月五日大吹雪で津鉄運休、廿日間運休。二十三日ようやく運転される。 ◎二月十一日大地震あり。 ◎三月七日貨物連絡船青函丸沈む八十名溺死。 ◎三月二十九日大雨家屋浸水多数堤防破れる。 ◎七月十五日金木運送店裏と二ヶ所米機爆撃。

昭和二十一年

新米ヤミ価、四千六百元に高騰。

明治三十四年丑歲

(大豊年)

小寒十一月二十七日、大寒十二月十二日、小寒の内十二月八日夜地震あり、大寒の内十二月十四日夜、二十一日夜と二十日昼と地震数度あり、因って本年豊凶思考するに左の通り稲作であり、上田老反歩七俵以上、中下田共七俵、下々田は五俵の収穫を得たり。

明治三十五年寅年

(凶作)

此年は大雪で、春より氣候不順、氣節の遅れ土用中は涼氣あり、蚊張いらず、田草取りは手足冷氣のあり、大抵二番草りさい着伏、七月十二日になれども稲は

六十銭何年前よりなき事である。 小寒十二月八日、大寒十二月二十三日寒中に降らず結氷なし、小寒入り初めより雨にて毎日の雨天あり、大寒は晴天にて、小寒のなか、夜に雷鳴せり、三十六年卯年は如何なる年になるや。

明治三十六年卯年

(例年作)

正月一日は己の日晴天であり、正月中は陸路にて足駄にて従い居り、二十四日より雪道にて大釈迦まで馬櫓往來せり。 二十五日より農家の肥料運搬出来、正月二十九日三年より少々雨ふり、雪は又消え、北海道行漁夫は下浜へ行くに誠に困難せり。

明治四十二年

◎四月七日未曾有の暴風、東風強く所々屋根破れ、近年まれな春水害。 ◎五月三十一日当地にて田植初め。 ◎九月十八日初めて新米粳。

明治四十三年

◎八月東風既に十四・五日止まず心氣何十日吹続きければ、盆より熱晴にて、

悪し。 ◎十月八日新米精白す。

明治四十四年

◎一月大雪降り続き馬櫓往來ならず。 ◎四月十五日田打ち初める。 ◎五月十七日晴天続きで田掻き困難なり。 ◎五月二十一日連日の日照りにて掻いた田も割れた。 ◎十月四日初雪降り岩木山と

明治四十五年

◎二月二十二日積雪雨のため消え河川に水増す。 ◎三月二十九日氣候早い年で田方へ『シノベ』取り行う。 ◎四月十三日田打ち初める。 ◎六月五日田植え当村皆植え付け着手せり。 ◎六月十七日田植え仕舞いになる。 ◎七月十二日菜種刈り取る。 ◎八月十一日早稲所々に出穂 見る。 ◎八月二十二日出穂盛りとなる。 ◎十月二十二日初雪降る。 ◎十月三十日晴天続きのため稲揚

大正二年

(凶作)

◎一月雪風吹のため馬往來杜絶し人も容易ならず。 ◎六月七日田植初める。 ◎六月二十九日大雨で岩木川水位十八尺

ろあり。◎九月二十六日大風雨あり、二十一日稲刈り初める。◎十一月二日近年來未曾有の大風にて、稲芯の被害強く。◎九月二日早稲稲花中掛る。◎九月十七日晚稲花掛り盛ん。◎十月

大正三年

◎二月十二日肥丸き初める。◎三月九日田地に春水害あり。◎昨年冬より本年春に雪は不足にて旧二月十五日草履ばき。◎四月六日早き人畑へ芋植付。◎四月十三日村農会苗代に掛り人あり。◎四月十九日苗代種蒔し田打ち。◎四月二十三日苗代糸ミミズで苗刈消え。◎四月二十七日苗代糸ミミズ起る。◎五月十三日喜良市鹿の子山和田に行き餅膳し。◎五月十六日苗不足のため藤枝に講求に行く。◎五月十八日早魃のため農民用水困難す。◎五月二十七日忠右エ門・善右エ門その他田植え初める。◎六月五日本年苗不足植付けを中止する者もあり、山中已之助、藤枝長三郎より二斗時き苗代一枚買、数は壱千把あり七円。◎六月十九日田の草取り。◎六月二十八日当村にて飯詰川向い泡開墾にて柴払い着手。◎七月二十二日自家四番草取り。◎八月九日中稲花結ぶ。是迄の水害地の田は堤防を築きため水害

もなし、稲の成長したる事、而かも萱と同様となり長五尺二寸もあり、是歳大豆粕魚粕を肥料施耕したる田は、稲は成長し、並に株が茂出て三・四株で壱把となり、壱反歩より八俵乃至其れ以上もあり、誠に本稲増熟せり。

畑地も粟・大豆・小豆其他收穫増取せり、本年は春苗代に糸ミミズ発生し、昨年凶作の扱は悪しき為糸ミミズ発生におよんで、種は失え苗の發育は宜しからず。二斗時苗代壱枚七円以上にて藤枝より購買し所。驚きは藤枝村で苗の売高は六・七百元を得たるとの言っています。何んの為で苗發育は善しきと言つて、藤枝は砂地にあり因て糸ミミズ不発生である。

大正四年

◎一月十六日吹雪、積雪にて馬通行杜絶す。◎二月一日頃は雪は余程消えたれ共、七日頃より又雪は多積して再び馬往来ならず。◎四月二十七日苗代種蒔き。◎五月十日向へ田、田打ち初める。◎五月二十四日気候冷むし為苗発生患

大正五年

◎二月八日肥丸き。◎二月二十三日籾織の田へ肥運搬。◎四月十五日当地工藤田打ち初める。◎四月二十日種蒔。◎四月三十日籾織り田打ち。◎五月二十一日日本村にて田播き初める。◎六月五日田植え初める。◎六月二十八日

大正六年

◎二月八日肥丸き。◎二月二十三日籾織の田へ肥運搬。◎四月十五日当地工藤田打ち初める。◎四月二十日種蒔。◎四月三十日籾織り田打ち。◎五月二十一日日本村にて田播き初める。◎六月五日田植え初める。◎六月二十八日

大正九年

旧二月十三日大雪降り、四月七・八兩日大雨と雪消えの出水にて当地の肥流失。五所川原の乾橋の通り小船にて往来。◎二月八日肥丸きする。◎二月十七日肥丸運搬する。◎三月二十九日種蒔水に浸す。◎四月十三日津田與作田打ち初める。◎四月二十三日自家種蒔。

大正七年

寒中に是れと言う雨降らず、本年の稲作は如何なるや、何れの貯水池の水門より水流れず是も不審なり。◎二月十日及前後無事、青田の稲は悪し、二番草にて終りたる家もあるも、其の後の稲發育良し大暑になりました。此の年青田何日迄もと思われ、凶年と思ふ所、三番草取り后、暑氣増し稲は実

大正八年

寒前及寒中共大雪寒氣厳しく、山口大佐八甲田山にて凍死此の方なき大雪であると、寒氣強き為め、井戸水減じ、一日も暖気なし極寒であり。◎三月六日肥丸き。◎五月十三日苗の發育よろしく思われる。◎五月十九日田播きする。◎五月二十八日当時野原山に牧草を蒔く。◎十月二十二日岩木山初雪。◎十月二十四日稲付け初まる。◎十二月十五日雪囲い。

(平年作劣る)

り、依つて壱反歩四俵作の稔り。◎二月六日大吹雪で馬往来杜絶せり。◎二月十三日肥丸き。◎四月十三日田打ち初める。◎五月二十三日田播き初める。◎六月五日当村田植え初める水不足。◎六月二十八日自家耕地整理の田植付け。◎九月二十三日稲刈り初まる。

と神島○○○。

◎三月六日肥丸き。◎五月十三日苗の發育よろしく思われる。◎五月十九日田播きする。◎五月二十八日当時野原山に牧草を蒔く。◎十月二十二日岩木山初雪。◎十月二十四日稲付け初まる。◎十二月十五日雪囲い。

◎大正八年十二月三十一日より風なし雪不足門松不便。◎一月十三日雪消え道路悪し、午前三時地震あり。◎一月十五日日本小栗崎の田地壱反六百円、小田川の辺。◎二月二十四日自家肥丸き。◎五月十五日田播き。◎五月二十八日自家の田播き。◎六月四日嘉瀬田植え初まる。◎六月十四日自家田植え。

◎六月十六日苗不足豊川より苗貰う。◎六月二十三日籾織田水充分である。◎六月三十日当村虫祭り。◎七月五日耕地整理の田植えせり。◎七月八日、七日の出水より堤防破れ当地田地は一面に浸水。◎七月二十六日大暑強し九十度以上。◎ハタオリ水の為め三番草止め。◎七月三十日雷鳴ゴロゴロ朝昼晩まで鳴るも雨降らず如何にも不審で晩より大雨で十川附近雹降る。◎七月三十一日金木境鳴繁田出穂見える。◎八月十一日十川・岩木川増水。◎八月十九日東風強し、モチ稲堅し。◎九月十七日当地稲刈初まる。◎九月三十日稲は坪刈以上一反歩二百三・四十嶋あり、又は二百嶋は平均の評判。◎十月二十八日耕

地整理田稲運け ◎十一月五日岩木山へ初雪降る。◎十二月二十八日大吹雪の為め人馬往来ならず。◎水害(旧五月二十一日より)七月六日より七日に入るまで降雨にて『オシイバ』防水堤防決潰し水浸し中、堤防を越し駒留に浸水し、『新開』の樋門破れ水浸し、一面海となり、自家の『ハダオリ』は腰限り水にて中にも行くことならず。明治三十一年の水と同じ、『新開』にては堰に石と土との事であり、恐るべき浸水であり、当地は兎に角、他方で橋梁流失の箇所数多あり。

◎本年夏嘉瀬川畑中橋梁新築加工替し同年は水害は余損なし共、出水は何十年以前もなし。同年○稲は長き糸の如し。◎本年種蒔より冷風ありて五十日以上も田植苗軟弱の為植付け遅れたり。◎大豊年水害遇はざる田は一反七・八俵と言ふ。◎寒前に寒氣激し、寒中は雪と晴天と同じ、寒過ぎると雪降り続き、正月なり共雪なり。又々寒氣もあり、本年は如何

なるやと考居る処大豊年となり、旧八月八・九日より稲刈初め、沓反こなせば七

・八俵。

大正十年

◎三月二十五日村内雪消えたるも、村落間雪路である。◎四月二十一日種蒔き、◎四月二十五日田打最中。◎五月二十日田植え。◎六月二十七日虫祭

り。◎九月二十二日稲刈り。◎十月十七日稲上げ最中。▲稲は多収なし共、本年は上田よりも下々田収増し。

大正十一年

◎一月二十日大吹雪人馬止絶。◎一月二十一日前日に引続き今日も寒き寒気にて、大雪降り人馬往来止絶す。◎二月四日長富經由五所川原馬橋は往来せず。◎二月十七日廿年此の方なき東風家屋破損せり。◎二月二十日雪路悪きに付肥料運搬困難なり。◎三

月四日東風ベタ雪大典沢橋出し。

◎五月十五日田掻きあり。◎五月三十日鳴海〇〇(古町)田植。

▲七月下旬より連日の雨にて出穂せず花も心配の処、十二日より晴天となる。比較的晴天候続き酷暑にて水不足を来たし。

大正十二年

◎三月二十日堤防破る。◎三月二十四日道路の雪平均四尺軒下十尺なり。◎十一月二十九日初雪。

▲寒中大雪にて、雪屋根より高く農作物の如何心配やらん。北海道稲作不作、耕地整理の田半作。

▲大正十三年一月十日大吹雪。◎七月十七日植付けの時は充分用水ありたれども、その後今だに降雨なく、日本各地雨乞せり。

日大風暴風雨屋根とらる。◎四月十日車ようやく通る。

▲四月数十年来の出水五所川原全部浸水長富学校の通路二尺飯詰川堤防破る。

昭和五年

▲旧年越雪少なく田畔見える。▲彼岸前の稲刈はまれ。

◎汽車より馬橋不通。◎四月二十

六日以前は僅かなるに田打桜例年より満開。◎五月二十四日山中才七田植え初める。◎十月二十四日初霜。◎十月二十六日今秋は例にな

き晴天続きにて稲運びの頃よろし、全国的に大豊作。◎十一月七日初雪吹雪く。◎十二月三日大吹雪七寸の積雪。

▲近年未曾有の大豊作なり、新米十月六日七・八十銭となり農民大困り。

昭和六年

▲凶作と言う程ではないが七分作

◎三月二十四日雪あり橋も自由。

◎五月五日田打一番掛。◎七月二

日田植え。◎八月十五日過ぎてても単衣。◎十月十日稲刈り。

昭和七年

▲一月一日門松雪の上に樹たず、自動車運転せり。雪は数十年来の小雪にて車馬は寒中にも往来せり。田打桜は稀有花なり(花多し)。

▲四月近年未曾有の道路なり、秋同様車馬難気せり。

▲昭和七年上田式百四拾円、中田式百円。

◎一月二十一日雪約二米前後となる。

◎四月十九日種蒔き。◎五月九日田打初め例年より二十日後。◎六月六日東北風寒し(水不足田植三分の一で植付けなし。◎六月九日苗植付け中止。

◎六月二十八日晴れて雨あるも小降り植付けせぬ田もあり。◎六月二十九日虫祭り。◎七月三日虫祭り後も田植えあり、◎七月二十四日大暑八五度以上と

大正十四年

大早魃車力方面金木へ二割増し。

揚水機向く。幸いにして豊作。平年作の

大正五年

◎四月十三日苗代時なれ共、雨又は霰一週間も続く。

▲七月二十六日より大雨にて田畑水害を安じ、警鐘を打つ。

▲当年苗発育よく、植付後経過何十年

昭和二年

▲青森県米作実収高、前年より六万二千石増収。青森県本年度米実収高は二十日発表されたが、作付反別六万四千八百町三反、収穫高玄米百八萬壹千壹百九拾式石。価格式千七百六拾三万九千六百

四拾円で、一反歩当り収穫高は壹石六斗六升八合である。

▲米作は近年稀なる豊作に予想されしも、刈取らせしに平年なり。沓反歩五俵。

昭和三年

▲早魃数十年来よりの秋に至り雨あり大豊作

◎六月二十五日虫祭り。◎八月二十七日二ヶ月降雨なし大早魃。

昭和四年

▲一月元旦は昔より門松は雪に差して立たずと言うも、当年は雪不足、そのまま立てり。二月末にても厳寒吹雪あり、大正二年と同じ年なれば皆前途あやしめ

り。春大暴れ近年まれ。

◎四月三日雪少しも消えずして増せり。◎四月七日雪切りに出る。◎四月二十一日、二十一日より二十二

なる。◎八月二十六日大暑あり皆無作も出る。

昭和八年

◎車道裏畑雪少々。◎二月二十五日スキー大会、二十六日汽車止る。◎四月二十六日種蒔き。◎五月三十日田植

え。◎六月二十七日虫祭り。◎七月三日九二度。

昭和九年

▲今年春より時に非常に暑く、又寒く、田植中は晴天続きにて終れるも、土用入より東風止まず、フトン必要なり、益はさほど異りなきも夜寒し、稲刈中晴天なく、稲運び中もやや晴間出る。十一月二

十八日大吹雪となる。五分作なり。

▲十月十日稲刈中も稲運び中も晴天なく晴れては二日雨降り、天恵みなき年なり。作柄は六分作、冷水の田は半作。

昭和十年

▲凶作の年の冬は雪薄との諺あり、九年冷害不作なり。旧年十二月中雪薄車馬道なり。例年より一ヶ月早く雪切り、自動車運転したるも日中温度なく、夜はベタ雪降りて数日間、四月三日のことなり。

▲北郡水害被害六千町歩、皆無作四千五百町歩、残りの歩作三分作。

▲当年稲作青田は見事なるも、出穂中、中郡白子の堤防破れ、十川一帯・三好・嘉瀬・中川・十数日間浸水、稲腐乱せり。加うるに東風の為め冷害となり、皆無

◎四月三日毎夜雪降り屋には消える。◎五月四日一番掛に水増。◎七月十日田の草取り。◎八月十日旧十三日盆東風川盆にても東風のため綿入なり。出穂早稲あるも中々はかどらず。◎九月十日四日蚊張不要となる。

昭和十一年

◎二月二十九日東風ベタ雪尺余

降る。◎四月十日嘉瀬町内雪消

えいよいよ車道となる。◎七月十一日今になりても蚊張いらず。◎九月二十三日稲刈り。◎九月二十八日強風大雨にて水害『エマ』の堤防破る。◎十月四日夜より大台風(大正六年十月一日の台風と同一)。◎十月二十二日初雪降る。◎十一月二十六日稲全部田圃よりくばり終わる。

▲当年は昨年の雪数十年来の大雪なりしも消え方割り合い早く、苗代仕末にも後れず。苗の発育良く、植付けも晴天続きにて一日も休みなく終れり。雨も適当に降り、水不足もなく、高温なく、田草取中暑気あり、旧盆も余り暑からず、天候も昨十年来冷気と同様なりしも、出穂期に南西風三日続きし為か、開花もより

昭和十二年

◎三月二十二日雪道路一尺五寸以上となる。寒気相当厳し。◎四月十七日種蒔き。◎五月二十七日村内田植初める。◎七月十一日二番除草。◎九月十一日台風。◎九月二十一日稲刈り。◎十一月十九日初雪。

完全なる実を見るに到れり。神の助け天祐と言ふべきなり。一反上田八俵、中田六俵、大根不作なり。▲三月十一日金木に用事にて行きしに雪は電燈柱の三分の一なり。伊藤製材所の『ナガレ』は棟より高く、金木道は平均十尺なり。▲当年は前年と同じく、稲は雨続きの為めと、昨年水害冷害にて稲肥料吸収なき為か、田の草取りは二番にて終りたる人多く、草取り中冷気あり、殊に日食後思はしくなく、農家にては心配せしが、出穂中下り風二・三日吹き続き、暑さも加わり後、二・三日の冷気続けば凶作とならんとせしに、天候が暑気加はり、水害もなく一帯豊作となれり。

昭和十五年

◎一月三十一日零下十度以上寒さ一層加わり酒も凍る。◎二月四日餅搗き。◎五月二十四日田植付あり。◎七月十四日十川増水。◎七月二十二日耕地整理田約十日間も稲冠水。◎十月三日稲刈終り。◎十一月二十七日当村にて初めて道白くなる。▲当年平作以下、上田六俵、水害地皆無もある。

昭和十六年

◎一月四日屋敷内『下ぶき』凍る。◎二月二十二日大吹雪隣行きも出来ず。

◎三月十九日前道路雪なきも裏畑雪約五寸位。◎五月二十五日田植え。◎六月九日水稲苗発育至って不良の為苗不足。◎九月一日出穂例なき好日和。◎十月三日午後十時突然警鐘鳴る。要は防霜

昭和十七年

(全国的大豊作)

◎一月十三日数年来の酷寒。◎二月五日大吹雪大寒以上。◎四月三日庭の取外し。◎四月七日夜雨、雪裏畑消え。◎五月二十日東風西風数日来る気温下り綿入なければもたぬ有様なり。◎五月二十八日田植始まる。◎六月十二日雨乞。◎七月二日モホ鳥庭木にて鳴く。◎九月十八日

昭和十八年

◎二月二日毎朝嵐が強い。◎四月三日畑外し。◎五月十日田畑乾かず。◎六月一日原田奥太郎田植え始める。◎六月二十五日田植え村仕舞。◎六月二十六日虫祭り。◎七月四日田水不足。◎八月十三日暮より大雨雨嘉瀬金木大増水。警鐘鳴る。

昭和十三年

◎一月元旦雪道四尺。◎四月二十三日種蒔き。◎五月十九日嘉瀬溜池堤防破る。◎六月十一日入梅前田植え終る。◎六月十四日虫祭り。◎七月十日大雨水害、家屋浸水百戸

昭和十四年

◎一月三日雪道路三尺以上。◎一月五日大吹雪風速廿五メートル以上。◎一月十四日大雪で出入口封鎖さる。◎一月二十一日汽車不通。◎一月二十五日津鉄除雪村全部出動。◎三月十二日大水、山文の家にも浸水。◎三月二十九日雪切道路三尺。◎四月二十三日桜桃下残雪あり。◎五月二十六日伊藤仁八

昭和十九年

▲本年度水田植付後雨らしき降雨七十数日もなく、嘉瀬中菴並に金木焼街道西方にも処々土割せり。発育は割合良く、殊に水掛り良き田は草丈延び百度以上数日も続き旧盆は花盛なり。▲春寒の為め苗発育なきも、田植季例年より暖かく、苗に追はれて植付せり。

昭和二十年

▲昭和十八年十二月十七日頃より雪十数日ありしも、二日前より天候良くなる。◎一月一日雪割合薄く雪下しの必要なし。◎五月六日田打桜三分咲く。◎五月二十八日原田奥太郎田植初める。◎六月十八日茄子本植え。◎六月三十日玉菜本植え。◎七月六日タデコ二番

昭和二十一年

◎一月二十八日二ノ沢三ノ沢新出し吹雪で完了ならず。◎二月五日大吹雪で門口ふさがる。本日より津鉄不通となる。◎四月二十四日苗代種蒔。◎六月七日田植え。◎七月七日田の草取り。▲昭和二十一年大豊作、供出米十一割。終戦直後肥料なきも天恵による大豊稔。

嘉瀬八幡宮境内に鎮座奉祠せる人丸神石碑に寄せて

柿本人麻呂の伝記（下編）

外崎 三千男



作歌解義（一）

かたりべ第四集（63頁）までに述べて来た所に依って、人麻呂の伝歴の既略と万葉集撰集の最も重要なルーツ的存在であり、万葉集に撰録されているものでは、前述のとおり七六首あるが、ほかに別本「柿本人麻呂歌集」に二九六首も載っているから、合計三七二首にも上ざる程で、作歌数は和歌史上、当時代の最多数を占めていること前述したとおりで重ねて述べることは却って、煩瑣を招くことで申し分けない次第である。又人麻呂の歌の雄渾にして至誠の情に満ち満ちていること、歌全体の優越性についても前述してあるから、ここでは省略することも当然のことと、今回は何よりも人麻呂の本領たる作品一首一首の「釈義」をとおしてその時々の人麻呂の真情に接したいものである。但し、その「釈義」も「語釈」等にまで亘ってしまうと、頁のスペースもつい大幅にとられてしまし簡単にとおり歌の意味が、理解された所で措かうと思う次第である。尚、歌の頭上にある番号は「万葉集の撰集せられたときの「長歌」「短歌」の置かれた順番の「番号」である。」

過^ニ近江、荒都、時柿本人磨作歌

二九たまだすき 畝傍の山の 櫃原の ひじりのみ代ゆ あれましし
神のことごと つがのきの いやつきつきに 天の下 知らしめし
しを そらにみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越えい
かさまに 思ほしめせか あまぎかる ひなにはあれど いはばし
の 近江の国の ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけ
む 天皇の 神のみことの 大宮は こと聞けども 大殿はここ
と言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日のきれる もも
しきの 大宮どころ 見れば悲しも

大意 畝火の山の櫃原の聖帝の御代、即ち神武天皇の御代から、世に御いでなされた神、即ち天皇のことごとくが、次から次へと天下を治められた大和の国を後にして、奈良の山をこえ、如何さまに御思いなされたことか、遠いなかであるけれど、この近江の国の大津の宮に、天下を治められたという神のみこと、即ち天智天皇の大宮は此処であると聞くれけれど、大殿は此所であると言うけれど、春の草のしげく生えている、又春の日も霞んでいる、その大宮所を見れば悲しいことである。

反歌 一

三〇 ささなみの滋賀の辛崎^{かき} 幸くあれど大官人の待ちかねつ

大意 ささなみの滋賀の唐崎は変ることなくあるけれども、大官人の船は待っても来ることはない。

反歌 二

三一 ささなみの滋賀の大わだよどむとも昔の人にまたも会わめやも

大意 ササナミの滋賀の大海は流れずに居ろうとも、昔の人にまた会うことは出来ない。

x x

36 やすみしし 吾が大君の 聞しをす 天が下に 国はしも さはに
あれども 山川の 清きかふちと み心を 吉野の国の 花散らふ
秋津の野べに 宮ばしら 太しきませば ももしきの 大官人は
船なめて 朝川渡り 舟きほひ 夕川渡る この川の 絶ゆること
なく この山の いや高知らず みなぎらふ たぎの みやこは
見れどあかぬかも

大意 吾が大君のお治めになる天の下に、国は多くあるけれど、山や川の清い河沿いの地と思召して、此の吉野の国の、秋津の野のほとりに、宮柱を太く立てておいでになれば、モモシキの大官人等は船を並べて朝の川を渡り、船を並べて夕べの川を渡る。此の川のように絶えることなく、この山のようにいよいよ高く世を治められる、激流となって流れる急流のほとりの宮処は、見ても見ても面白い。

反歌

37 見れど飽かぬ吉野の川の常滑^{とこなめ}めの絶ゆることなくまた帰り見む

大意 見ても見ても面白さの尽きない此の吉野の川の、常に滑らかな巖のように、絶えることなく、又更に来て見よう。

38 やすみしし 吾が大君 神ながら 神さびせすと吉野川 たぎつか
ふちに 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせば たたな
はる 青がき山 山つみの まつるみつきと 春べは 花かざし持
ち 秋立てば もみちかざせり（或いはもみち葉かざし）夕川の
神も大みけに 仕へまつると 上つ瀬に 鴨川を立て 下つ瀬に
さでさし渡す 山川も よりてまつれる 神のみ代かも

大意 吾が大君は、さながらの神として、神の行をなさると、吉野川の急流の河沿いの地に、高い殿を高く立てられ、その高殿にお上りになり、国見をなされれば、重なり合って青い垣の如くめぐらす山は、山の神の天皇に奉る御調として、春は花を山の頭にかざし、秋が来ると紅葉を頭にさした。又夕べの川の神も、山神の春秋の御調に対して、天皇のお膳に奉仕申すというので、上流の瀬には鴨川を立て、下流の瀬にはさで網をさし渡す。かくの如く山の神も川の神も、天皇に帰依し奉つてお仕え申す、まことに神の御の御代であるよ。

反歌

39 山川もよりてまつれる神ながらたぎつかふちに船出せずかも
大意 山も川も帰服し奉仕する神様として、急流の川のほとり船を乗り出されることよ。

x

40 幸 伊勢国一時留 京柿本朝臣^{あそみ}人磨作歌 阿胡^{あこ}の浦に船出すらむを
とめ等がたまもの裾に潮満つらむか

大意 阿胡の浦に船出をするであろうおとめ達の美しい裳裾に潮が満

ちて来るであろうか。

45 輕皇子宿安騎野時柿本朝臣人磨作歌

やすみしし 吾が大君 たかてらす 日の皇子 神ながら 神さび
せすと ふとしかす 都をおきて てもりくの 初瀬の山は ま木
立つ 荒山道を いはが根の しもとおしなべ さか鳥の 朝越え
まして 玉かぎる 夕さりくれば み雪降る 阿騎の大野に はた
すすき 小竹をおしなべ くさまくら 旅やどりせず 古へ おも
ひて

大意 (ヤスミシシわが大君、タカテラス皇子は、神として神らしく振舞われると、立派な都をあとにして、コモリクノ初、初瀬の山では、木の立っている荒い山道を、岩の上の藪を押しなびかせ、さかとの朝越えて行かれて、タマカギル夕方になれば、ミユキフル阿騎の野原に、スキヤ小竹を押し伏せ、クサマクラ旅宿りなさる。昔を思つて、)

46 阿騎の野に宿る旅人うちなびきいもねらめやも古へおもふに(日並皇子 草壁王の過ぎし日の御事を思うと。)

柿本人磨作歌

47 ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君がかたみとぞ来し
大意 草を荒れた野原ではあるけれども、紅葉の葉の如く過ぎ去り、亡くなられた父君の日並皇子の形見であると思つて来たことである。

柿本人磨作歌

48 東野 炎立所見而反見為者 月西渡

ひむがしの野にかぎろいの立つ見えてかへりすれば月傾きぬ

大意 東の野に朝の明け来る光の立つのが見えて、ふりかへつて見れば月が傾いて居る(この歌は万葉集中、人磨の作歌として、最も有名であるから。)

反歌二首 (柿本人磨作)

132 石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

大意 石見の国の高角の木の間から私が別れを惜しんで振る袖を、妹は見ただであろうか。

133 ささの葉はみ山もさやに乱れども我は妹思ふ別れ来ぬれば

大意 山の風に靡く様が目にはっきりと見えて笹の葉が風に吹きみだれて居るけれども、その中であつて私はただ妹を思う。別れて来たのであるから。

×

×

134 或本、反歌曰。これは柿本人磨の作として別の本に記載されているが、133よりは劣るから柿本人磨の実作ではないと見られている。

(134) 石見なる高角山の木の間ゆも吾が袖振るを妹見けむかも

大意 石見の国にある高角山の木の間から、まあ吾が袖を振るのを妹は見ただであろうか。

×

×

135 つぬさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる いくりにぞ ぶ

かみる生ふる ありそにぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡きい子を
ふかみるの 深めて思へど さ寝し夜は いくだもあらず はふつ
たつたの 別れし来れば きもむかふ 心を痛み 思ひつつ かへ
りみすれど 大舟の 渡の山の もみち葉の 散りの乱りに 妹が
袖 さやにも見えず 妻ごもる 尾上の山の 雲間より 渡らふ月
の惜しけども 隠ろひ来れば 天づたふ 入日さしぬれ ますらを
と 思へる吾も しきたへの 衣の袖は 通ひぬれぬ ますらを
大意 石見の海の辛の崎にある海中の 巖には、深海松が生えている。

ある。小学校の国語読本でもこれを取り上げ、短歌の紹介と作品の内容のわかり易い点から、万葉集の作品の一部として、紹介の役をつとめに使われている。

万葉集 卷第二

131 柿本朝臣人磨從石見別妻上来時二首並短歌

石見の海 角の浦みを 浦なしと 人こそ見らめ 瀉なしと
海をさして にぎたづの ありその上に か青おふる 玉藻沖つ
瀉 朝はふる 風こそよらめ 夕はふる 波こそ来よれ 波のむた
かよる かくよる 玉藻なす より寝し妹を 妹がたもとを
露霜の 置きてし来れば この道の 八十くま毎に 萬たび かへ
りみすれど いや遠に 里はさかりぬ いや高に 山も越え来ぬ
夏草の 思ひしなえて しのぶらむ 妹が門見む 靡けこの山。

大意 (石見の海の角の浦あたりを、入江もない所と人は見るであろう。よし浦はなくても、よし瀉はなくても、海の方に向かって、にぎたづの荒い巖の上に、青青と生えている玉藻や沖つ瀉に朝吹く風が吹き寄せるでしょう。夕べ立つ波が来寄るでしょう。その波と一緒にさきぎまに寄り合う玉藻のように、相寄つて寝た妻を、後に残して来れば、この行く道の多い隈々毎に、幾度も幾度もうしろをかえり見るけれど、次第に遠く妻の里は離れてしまった。次第に高く山をも越えて来てしまった別れを悲しみ思ひしおれて、私のことをしのんでいる妻の家の門をも見よう。なびげよ、この山よ。)

反歌二首

136 青駒の足掻を早雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける(或はあたりは隠り来にける)

大意 青駒の足どりが早いので、雲のいる遠い所まで、妹の家のあたりを通り過ぎて来たことである。

137 秋山に散らふもみち葉しましくはな散り乱りそ妹があたり見む(或は散りな乱りそ)

大意 秋の山に散るもみち葉よ。しばらくは、散り乱れるなよ。妹の家のあたり見よう。

ある本の歌一首と短歌

138 石見の海 津の浦を無み 浦なしと人こそ見らめ 瀉無しと 人こそ見らめ
よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 瀉は無くとも
いさな捕り 海をさして にぎたづの 有磯の上にか青生ふる
玉藻沖つ瀉 明け来れば 波こそ来寄れ 夕されば 風こそ来寄れ
波のむた か寄りかく寄り 玉藻なす なびき我が寝しきたへの